NO.18　発行：神宮館　東京都台東区東上野 1-1-4　TEL03（3831）1638　http：//www.jingukan.jp　発行人：木村通子

ももとせ便り

autumn
平成二十四年壬辰
秋号

七十二候

一年を七十二の季節に分け、気象の動きや動植物の変化を五日ごとに表現したもの

八月七日ころ　立秋（りっしゅう）
三十七候　**涼風至**（りょうふういたる）七日～十二日ころ
涼しい風が立ち始める時節
三十八候　**白露降**（はくろくだる）十三日～十七日ころ
秋の気配が少し強くなり、朝きらりと光る露が降り始める時節
三十九候　**寒蟬鳴**（かんせんなく）十八日～二十二日ころ
ひぐらしが鳴き始める時節

八月二十三日ころ　処暑（しょしょ）
四十候　**鷹乃祭鳥**（たかすなわちとりをまつる）二十三日～二十七日ころ
鷹が捕らえた鳥を並べて食べる時節
四十一候　**天地始粛**（てんちはじめてしじむ）二十八日～九月一日ころ
暑さもようやく鎮まる時節
四十二候　**禾乃登**（かすなわちみのる）二日～七日ころ
稲が実る時節

九月七日ころ　白露（はくろ）
四十三候　**草露白**（そうろしろし）八日～十二日ころ
草に降りた露が白く光って見える時節
四十四候　**玄鳥帰**（げんちょうかえる）十三日～十七日ころ
つばめが南へ帰って行く時節
四十五候　**羣鳥養羞**（ぐんちょうしゅうをやしなう）十八日～二十二日ころ
沢山の鳥たちが食物を蓄えて、冬に備える時節

九月二十二日ころ　秋分（しゅうぶん）
四十六候　**雷乃収声**（らいすなわちこえをおさむ）二十三日～二十七日ころ
雷が鳴り響かなくなる時節
四十七候　**蟄虫坏戸**（ちっちゅうとをとざす）二十八日～十月三日ころ
虫が土中に作った穴をふさぐ時節
四十八候　**水始涸**（みずはじめてかる）四日～七日ころ
水田の水を干し始め、収穫に備える時節

十月八日ころ　寒露（かんろ）
四十九候　**鴻雁来**（こうがんきたる）八日～十二日ころ
雁が飛来し始める時節
五十候　**菊花開**（きくかひらく）十三日～十七日ころ
菊の花が咲き始める時節
五十一候　**蟋蟀在戸**（しっそくこにあり）十八日～二十二日ころ
きりぎりすが戸で鳴く時節

十月二十三日ころ　霜降（そうこう）
五十二候　**豺乃祭獣**（さいすなわちけものをまつる）二十三日～二十七日ころ
やまいぬが捕らえた獣を並べて食べる時節
五十三候　**霎時旋**（しぐれときどきほどこす）二十八日～十一月一日ころ
小雨がしとしと降って侘びしい時節
五十四候　**楓蔦黄**（ふうかつきなり）二日～六日ころ
紅葉や蔦の葉が黄葉する時節

玄関でのマナー

訪問先の立場で考えるのが大切

訪問する際には、約束をしてからがマナー

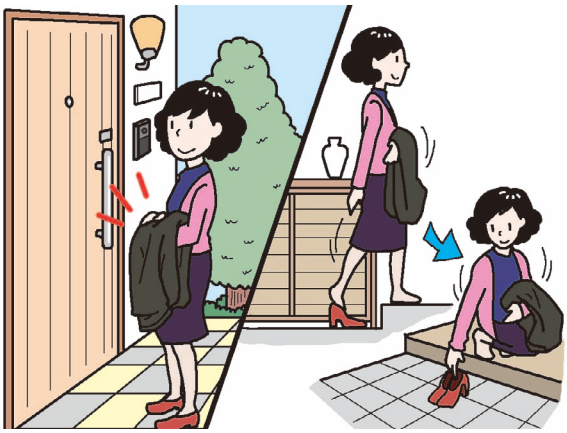
約束をしてから訪問するのが、まず初めのポイントです。予告無しの訪問は、相手の都合を考えないことになるので失礼になります。

到着は、約束時から二、三分遅めに

少し遅れて伺うのが基本

早すぎる訪問は、訪問先の準備を考えると迷惑になりかねません。二、三分ほど少し遅めの訪問を心がけましょう。

玄関にチャイムやブザーがある場合は、チャイムなどを鳴らしてからしばらく待ちます。しばらく待って応答が無い場合は、再度チャイムなどを鳴らして待ちます。チャイムなどが無い場合は「ごめんください」と声をかけます。



コートは玄関に入る前に脱いでおく

コートは、玄関の外で脱ぎ、手に持ってから玄関に入ります。コートを着たまま玄関先で用件を終わらせる際には、「コートのままで失礼します」とひと声かけておき、用件を済ませます。

靴は脱いでから揃えて隅に

靴は玄関扉を背にして脱ぎ、振り返って相手にお尻を向けないように横向きにかがんで、靴のつま先を玄関扉に向かって揃えて直し、隅に寄せます。ロングブーツなど着脱に手間がかかるものは避けて行くのが良いでしょう。

知っておきたいしきたり

分かっていそうで、分かっていない！
そんなことがありませんか？
あ、そうだったんだ！　と気がつくことがたくさん。
昔から大切にされてきた「しきたり」を
もう一度見直しましょう。

イラスト：下田麻美

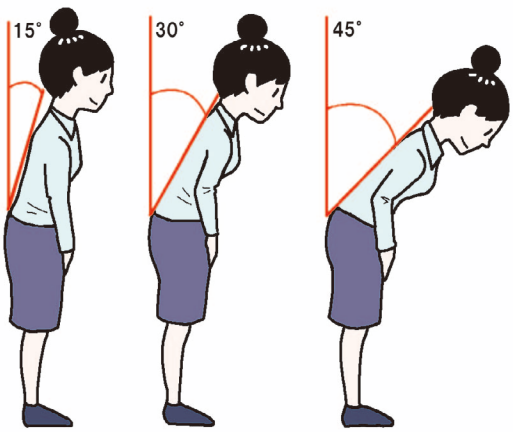
お辞儀の仕方

お辞儀は、タイプが三つに分かれる

敬意や謝罪を表す丁寧なお辞儀は四十五度の最敬礼

人間関係を築く上で欠かせないのが挨拶ですが、その中でもお辞儀は基本です。

大切な方への挨拶や謝罪の際に行うお辞儀が最敬礼の形になります。四十五度に頭を下げ、背筋は真っ直ぐにし、手は身体の横か前に揃えます。女性は、前で指を重ねるときれいな形に見えます。目線は、一メートル先くらいを見ます。



通常行うお辞儀は、三十度が基本

一般的なお辞儀は、お客様を迎えたり、訪問時に行う

来客に対応する際にも行うお辞儀で、最も行う頻度が高いものです。手は身体の横か前に。両手の指は膝にかかるくらいに揃えます。背筋は真っ直ぐ伸ばし、目線は二メートル先を見ます。

会釈と呼ばれる軽いお辞儀は十五度

すれ違った上司や来客、用件を伺う際のお辞儀

頭だけ下げるのではなく、背を真っ直ぐに伸ばして、腰から曲げます。十五度くらい曲げて、目線は三メートル先を見るくらいにします。手は身体の横か前に置き、両手中指が五センチほど下がったくらいにします。

挨拶の言葉は、身体を倒しながら言い、言い終わってから身体を起こします。

季節の花

古くから伝わる花の名前の由来や逸話を紹介

河原撫子

女子サッカーで一躍有名になった花

ナデシコ科ナデシコ属。秋の七草のひとつで、別名は「ヤマトナデシコ」

日本古来から伝わるナデシコは、日当たりの良い草地や河原などで見かける多年草の花です。淡い紅紫色または白色の花は花先が糸状に裂ける五弁花です。

カワラナデシコは、歌舞伎の『外郎売り』でのセリフに登場しますが、現在では昨年の女子ワールドカップでその名が知られるようになりました。日本女性を表す花ですね。

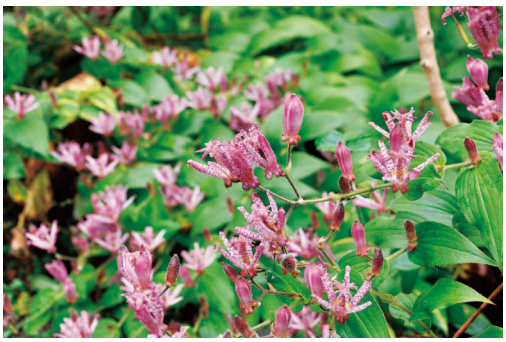
ホトトギス

斑点が、鳥のホトトギスの胸の模様に似ている

ユリ科ホトトギス属で、日本と台湾、朝鮮半島が原産地。秋に咲く花は、野性味がある

半日陰の乾燥しない場所で生育しています。品種ごとの違いが大きく、花壇や鉢植えで育てたりと様々な楽しみ方があり、園芸店に出回っています。

世界中では十九種ほどが知られていますが、日本固有の種は十種です。日本はホトトギスの中心地ともいえるでしょう。



家紋

それぞれの家にある家紋。自然や建物、植物や文字などがデザイン化され、美しい形になってきました。家紋には様々な願いが込められています。

イラスト：下田麻美

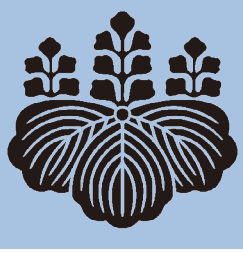
笠（かさ）

主な使用家：高橋、柳生

昔、竹などを使って高い柱（ハシ）を立て、神を迎えていました。ここから「竹を立てる」は「笠」となり、タカハシに通じることから笠は高橋氏の代表紋となりました。柳生氏の二枚笠は、坂崎出羽守から譲られたといわれています。

桐（きり）

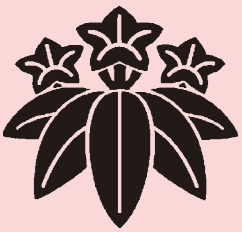
主な使用家：足利、明石、豊臣、永原、堀内



桐の木は鳳凰が宿る、めでたい木と言われ、桐紋は皇室で使用されました。後に足利尊氏や豊臣秀吉などに下賜され、その家臣へと伝わり、幕末には大名・旗本の五分の一ほどが使っていました。現在では日本国の紋章としても有名です。

竜胆（りんどう）

主な使用家：久我、岩倉、愛宕、久世、石川



竜胆は晩秋に楚々とした紫色の花を咲かせます。根は薬効があり、竜の肝のように苦いため、この字があてられました。葉が笹に似ているので笹竜胆とも呼ばれます。竜胆紋は花と葉を組合せて作られ、源氏の代表的な紋ともいわれます。

輪違い（わちがい）

主な使用家：塩冶、国司、高、小堀、脇坂

二つ以上の輪が組み合った紋ですが、重なった輪のように仲良く組むことを意味しています。輪違いの文様の中に唐花などを加えたものを「花輪違い」と言いますが、四つの輪が交差した「四方たすき」は「七宝紋」と呼びます。

日本の祭

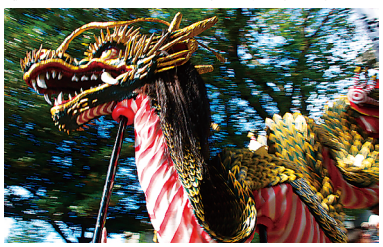
長崎・くんち

開催：十月七日（日）～九日（火）

由来：長崎市の氏神「諏訪神社」の秋の大祭です。寛永十一年（一六三四年）に、太夫町の二人の遊女・高尾と音羽が、諏訪神社の神前に舞を奉納したことが始まりとされます。荘厳な御神幸と国際色豊かな奉納踊りで豪華絢爛な祭礼として有名です。「くんち」の語源は、旧暦九月九日の「重陽の祝い」の風習が中国から伝わり、九日（くにち）を「くんち」と読んで、祭日とした説が有力です。

見どころ：「本踊」（今博多町）、「川船」（魚の町）、「オランダ船」（江戸町）、「獅子踊」（玉園町）、「龍踊」（籠町）などが今年の演し物。来年は「阿蘭陀萬歳」「鯨の潮吹き」「御朱印船」が行われる予定です。市内各町が七組に分かれ年ごとに奉納するため、「鯨の潮吹き」や「コッコデショ」など、七年に一度しか行われない演し物もあります。

会場：諏訪神社（長崎市上西山町）、長崎市公会堂前広場（長崎市魚の町）、お旅所（長崎市元船町）、八坂神社（長崎市鍛冶屋町）



富山・おわら風の盆

開催：九月一日（土）～三日（月）

由来：元禄十五年（一七〇二年）三月に八尾の町衆が「町建御墨付」を取り戻した祝いに、三日三晩踊り明かしたのが始まりとされています。「おわら」とは芸達者な人々が七五調の唄を創り、唄の中に「おわらひ（大笑い）」という言葉をさしはさんで町内を練り回ったのが、いつしか「おわら」になったという説や、豊作を祈った「大藁」、小原村の娘が歌い始めたという説があります。「風の盆」とは、雑節の二百十日前後は台風が来る時期なので、収穫前の稲が風の被害にあわないように豊作祈願をしたためと言われています。

見どころ：最後の五文字の前に必ず「おわら」と入る「越中おわら節」と「探り弾き」の三味線、胡弓の音色。そして「豊年踊り」「男踊り」「女踊り」の三通りの踊りです。

会場：八尾の旧町と呼ばれる十一の町

神宮館社長木村通子の 暦とわたし

皆様、お元気でお過ごしでしょうか。

時折「木村社長は暦を扱っている出版社のお家に生まれて、暦や方位をどの程度気にされるのですか？」との質問を受けることがあります。

幼少時代の思い出としては毎年、年末になると翌年度の暦をもらい、小学校低学年の頃から、一生懸命来年の運勢を読んでいました。難しい漢字も、暦の中で少しずつ覚えていった記憶があります。

人生のイベントとしては、結婚の際、入籍や式の日を決定するのに日の吉凶を見たのが一番大きい気がします。家族ができ子供に関する行事やお祝いごとが増えて、生活の中でも、より暦を意識するようになりました。

また運勢の悪い時はただやみくもに恐れるのではなく、できるだけ穏やかに静かに過ごすよう努める…自分の運勢の流れを知りそのリズムを上手に利用していくことが肝要だということを学びました。

今は守るものがあるからこそ、暦をもっと活用して運勢の落とし穴にはまらずに、健康に平穏に暮らせるように…との想いが強くなりました。

同じように暦を日本の良き文化として、日常の傍らに置き、継承してきてくださった読者の皆様に、いつも心から感謝しております。

通子のお気に入り

東京・上野に生まれ育った木村通子の親しんだお気に入りの数々を紹介していきます。

京都鳩居堂　桔梗の文香　315円

「文香（ふみこう）」をご存知ですか。平安時代、和紙に香りをたきしめる習慣が現代に引き継がれた、手紙に添える小さな香り袋です。封筒を開けると、ふわっと典雅な香りが立ち上ります。季節ごとの草花のモチーフを集めるのも私の楽しみの一つです。

次号のお知らせ

（十一月立冬のころお届け）

七十二候（冬）
しきたり　手土産の渡し方　他
花　日本水仙　他
家紋　巴・茗荷　他
日本の祭　秩父夜祭　他

この季刊紙名の「ももとせ」は「百歳（ももとせ）」。当社創業百周年を記念して、この名前をつけ創刊しました。

FSC www.fsc.org
ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C007468